

上田元将補講和紹介（その4）

上田元海将補（元第1術科学校長）の講話集から数点をシリーズで紹介する。

文化の野蛮性

15. 7. 19

人類の英知は、この悲しき宿命を乗り越えられるか——「続き」

同じ状況を髣髴させる話がある。明治の初期、「ザンギリ頭を叩いてみれば、文明開化の音がする。」という言葉が流行ったように、当時の日本には、政府の方針もこれあり、文明の取り込みに伴い、必然的に西洋文化の流入が進行した。西洋文明の言葉をどのように日本語として翻訳するか、これを担当した学者達の苦悶が続いたようである。その一つについて、紹介したいと思う。

「Science」を、どのように訳すか、現在の我々は、「科学」と言う言葉に何の抵抗もなく科学は、Science、自然科学は、Natural Scienceと頭の中で結び付けていく。しかし、日本の学者たちは、「西洋においては、日本と異なった厳しい環境の中で生き抜く手法として、よく自然を観察し、これを制御するNatural Scienceが生まれ、これが産業革命の発生と進展の原動力となり、各国の工業化、国力の増進に寄与している。」と認識しつつも、この考え方が世の中の主流となれば、人とは勿論、自然をも含む万物との調和、協調を原則とする生活様式と異なるので、ひいては、自然の制御が抑圧へと進行し、結局、自然破壊に陥ってしまう恐れがあるのではと考えた。そして、これは、若しかするとこの学は、「とが」になってしまう、よって、Scienceを「とがの学」、「科学」と翻訳したという。全く奥深い見識に基づく翻訳と考えるのは、私だけであろうか。

最近、地球の温暖化、環境保全の話題は、我々がほぼ毎日見聞きしていることである。昨年だったと思う、NHKの深夜放送の中に、環境破壊に関する解説があった。

地球誕生から今までを、365日、つまり1年とする。地球の環境に影響を与え始めた産業革命以来の期間、2百数十年を365日と対比した時間に換算すると、「1秒」であるそうだ。人類は、この除夜の鐘1秒前から除夜の鐘の間に、ここまで自然を破壊し、気温上昇は、オゾンホールの変化は・・・と解説していた。これを聞いた時、明治学者の見識、先見性の凄さに驚いた覚えがある。コラムの筆者 田村氏の言葉を借りると、明治学者の言は、「科学に基盤を置き、より高い文明レベルの豊かな生活を追い求めた結果、自然破壊が起こり、肌でこれを感じる昨今、「とがの学、科学」という用語は、説得力を増している・・・と思うのである。

「論理的思考」と言うと、一般に「科学的に整然とした思考」を指しており、その解は単一に近い。ところが、世の中には、「文化的論理性」と言う言葉がある。文化を分母に置くと、文化的に正しい論理的思考法は、世界に存在する価値観、文化の数ほど存在するのであり、正しいとされる解が相当数あるということになる。この「科学」と言う訳は、十分に文化的論理性に富んだものと言えよう。

宗教も、主義も結局は文化の一局面であり、あらゆる国益は文化的論理性から導き出さ

れていることを考えれば、世界の抗争の殆どが、価値観・文化の相違に起因して生起していると断言できるのではないだろうか。

国内社会の秩序と安定、国際社会の秩序と安定、それは、達成するのに必要な努力の程度は異なるものの、達成するための質的方向性として、「独自を基盤とする文化」と「協調を基盤とする文化」の価値観の相互認識、相互尊重と必要最小の共通道義・法の設定が必要と認識できるのではないだろうか。

人は、誰でも「生きる」ことに奔走する、次いで、「安定して暮す」ことを望む、更にどうせ暮らすなら「自己の価値観（文化）・主義で、」を望むようになり、生活の中に「主義」が取り込まれてくる。これが達成されると、人は「より豊かに、」を希望する。こうして、究極の豊かさを求めて際限の無いレースが展開される。この結果、人類は、多くの抗争を起こし、意図しなかった惨めさを伴う戦争へと入ってしまう、その結果、人のみならず自然をも破壊してきている……この捉え方に、誤りがあるだろうか。

こうして人の欲望を追及する中、人類は、そのために色々な組織化を成してきた。人類は、個人や家庭という小さな組織から、部族、民族という中規模組織、更に国家、世界国家という大きな組織までの間で、こうした多くの選択肢を持っているにも拘わらず、長い抗争と言う歴史の中で経験的に「国家」という単位を選び、有史以来数千年が経過している。その「国家」という形を成さない民族が安定した生活を得ていないことは、その一例として現在の中東を思い浮かべるだけで十分と思うが、冷厳な事実である。

社会の秩序は、端的に言えば道義と法の上に成り立っている。国内秩序は、同一価値観、文化の上に立つ共通の道義と、同じく強制力を伴う法の間隙のない整備によって保たれていると言える。しかし、国際社会は、そうではない。国際社会は、異なる価値観、文化の混在する社会であり、多くの道義が混在する他、隙間だらけの強制力の無い法の社会、極端な表現をすれば、無法地帯の世界である。それ故に、国際社会は、秩序が不安定になり惨めさを伴う動乱が生起するのは必然とも言えるのである。世界の歴史は平和期よりも動乱期の方が長いと言われるが、その証左であろう。

文化の野蛮性は、アドルノの言に始まった訳ではなく、悲しい人類の宿命のようなものとして、有史以来続いているのである。そして、それは前述した文化的論理性の相違に起因する主張の衝突が殆どなのである。したがって、この宿命を終焉せしめるには、それぞれの文化的論理性を少なくとも相互に理解し、これにより相互の信頼感を増進し、共通の価値観の最大公約数を求め続ける、こうして共通の道義を拡げ、共通の法を整備するという地道な過程を踏んでいくべきと思う。

個人間の場合を考えても、同じようなことが言える。友人であろうが、恋人——ここで言う恋人とは、最近、結婚相手と遊び相手の恋人を使い分けているように見えるが、遊び相手ではなく、結婚を前提とする恋人を言う。——であろうが、夫婦であろうが、最初は個人と個人の出会いから始まり、相互に理解し合って信頼が生まれ、少々な性格や考え方、主張の相違を許容することにより、其々の相互の愛が形作られ信頼が増し、これを繰り返すことにより、命の大切さや個人の尊厳を認めつつ、共通の価値観の枠を拡げていく。こうして安定した関係を構築していくのである。

郷土愛、愛国心、こうした一社会と個人との関係も同じである。個人が、郷土とか国と言う社会の生き様、つまり歴史を深く知ることにより、人を相手とした場合と同じく愛情

が芽生え、独善や自暴自棄に陥り反社会的行為に走ることなく社会の尊厳を認め、今後の社会の守るべき点、改善すべき点を認識し、自己犠牲的発想を持ち社会に対して建設的に行動するようになるのである。

個人対個人、個人対家族、個人対郷土、個人対会社、個人対国家、会社対地域、会社対国家、国家対世界、こうした組み合わせの全てにおいて、「相互に良く知り、相互に尊重、信頼し、相互に協調する。」プロセスが必要なのだろう。

今年7月、長崎で小学校卒業後間もない中学1年生による園児殺害事件が発生した。このニュースを聞いた人達は、一同6年前の平成9年6月末、神戸で発生した同種の事件を想起したに違いない。この時以来、少年対策として、教育、法的側面から各種の議論がなされ、処置されてきた。少年法の改正は、その代表である。

現在、この長崎の事件発生に対して、同様に教育、法的関係者のみならず一般市民全てが驚愕し、これが、社会の歪み、ひび割れによる現象の一つであり、将来に関わる問題であるが故に、どうすればこうした状況から抜け出せるのかと悩んでいるはずである。

昔の日本は、農業主体の国であり、土地と人が接合されて生きていく産業であることから、国民の大半は、国土に広く分散し、大家族を為し生計を立てており、従って、子供達は、祖父母から父母、子、孫までという縦の文化の中で、そして又、村や町という地域社会の中で交じり合うという横の文化の繋がりの中で、図式的に言えば、「立方体の文化」の中で育てられてきていた。こうした地域総出の交わりは、子供にとって良し悪し両面に作用したと考えるが、むしろ、あらゆるベクトルが作用することにより「健全な判断と行動」の醸成を先行させたものと思う。

しかし、明治以降、特に昭和の戦後は、国策として技術・工業化、加工貿易による国の存立に力が入れられ、この結果、自然と人口の都市集中化が進み、核家族化し文化の縦の糸が切れた。同時に、共通産業でない多種の職種への就業と言う形は、大人の地域社会における横の関係を絶ち、そして、戦後教育の失敗も加わり、「道義無き個人主義」が蔓延し、誰もが「プライベートという壁」を恰も個人の大権限のように振る舞い、「公」の観念が薄れていき、地域社会の横の糸が分断された、よって、子供を健全に育てる環境である文化圏は、仕事に明け暮れ家庭に参加しない父が除かれることにより社会道義教育が弱まり、母性愛がコアとなる母性教育が主となり、必然的に家庭内は母子による糸が残り、学校の同級生間の糸が加わる程度となり、「立方体の文化圏」は崩壊した。

そして再び、こうした事件の年少化に対する議論が始まった感があるが、やはり、精神医学的分析や学校教育、法的措置という局面に偏った感は否めない。こうした論点は勿論必要であろうが、「学校教育」や「法」によって、こうした流れを矯正することは不可能だと考える。「道義」が、抜けているからである。道義とは、勿論人が踏み行うべき道として理解されているだろうが、裏を返せば、人として行うべき行為のほかに、共同して生活する上で行ってはならないこと、つまり、社会生活上、個人が負担すべき制限、義務、制約という概念が入っており、子供側から見た「我慢教育」も含まれているのである。

では、どうすれば良いのか。 先ずは、家庭内における縦糸の復活が必要である。現在の日本の産業構造から大家族化は無理であろうが、父親が家庭内躰教育に参加して、父性によって為されるべき社会的道義心の教育を担当する。こうできる諸施策は、行政的になされる必要があるが、父親の意識改革のみでも、その殆どを補うことができると思われる。

次いで、地域内における横系の復活である。いずれは、学校から社会と言う共同生活に入る幼年、少年達を包む地域としての家庭教育が必要なのである。高齢者を含む青年から大人が地域としての家族化意識——最近、防犯上の視点から、地域住民こぞっての対策活動への参加があるが、こうした意識と動きは、その一例であろう。——をもって地域として、その特性に合った方策を見出し実行すべきだろう。そうすることにより、自然と命の大切さ、個人や郷土、国など社会の尊厳についての認識が生まれ、衿を正して堂々と人生を歩く若者が増えてくるだろう。

このためには、既に述べたが、地域内の人々が、その地域を良く知り、人を知り、愛に裏付けられた信頼で結ばれることがその基盤となろう。

現在、家元を去り「千 玄室」と改名された裏千家 元家元の千 宗室氏が、ある講話で「の」と「と」の文化について述べていたことを思い出す。元家元の趣旨を要約すれば、「昔は人や物との関係が、例えば「私の先生」、「私の生徒」と言うように、「の」で繋がれた関係であったが、戦後誤った個人主義の拡散により、「私と先生」、「私と生徒」という対等・独立の関係へと変遷した。親子であっても「その両親の子」が「両親と子」と言うように、まるで家族と言う最も親密な集団の中ですら関係が薄らいでいる。」と言うような内容だったと記憶している。

確かに、こうした「と」という薄い関係は、人対人、人対社会、人対自然など全ての関係に現実として着床し、その結果、事件や事故、災害などの原因の一つとなっていると感じさせるものがある。相手が何であっても、自然でも、公共でも、人であっても、相手を良く知り、愛と信頼のある「の」の関係になることが、家庭、地域社会から国際社会の各層に必要なのだろう。

世の中に、大別すると三つの人間グループが活動していると、私は認識している。それは、第一に、理想社会を目指して、理念の中で活動するグループであり、哲学者、宗教家等がこれに入る。第二は、理想を理念として持ちつつ、現実を前提として、活動するグループであり、政治家、企業家、自営業など大半の人々がこれに入る。第三は、同じく理想を持ち、現実を前提としつつも、その現実が崩れたこと、つまり超現実を想定しつつ活動するグループであり、国内法下での人命・財産を保護する任務を持つ消防士、警察官、そして言わば無法地帯のような国際社会において、国家、国民を守る自衛官がこれに入る。

各種の社会が、理想社会であって欲しいことは、全てのグループの誰しもが期待するところであるが、今まで述べてきたように、そうでないのが現実である。これらの三つのグループは、長期展望をしっかりと描きつつ、現実在即して、「現在の最大幸福のみを求める。」のではなく、「長期展望に寄与しつつ安定して暮すに必要な適度の幸福を求める。」ことを前提として活動すべきであると考えます。

これについて難しく考える必要はない、誰もが、私的だろうが、公的だろうが、幸福も調和、不幸も調和、つまり「苦楽をともに」、「あなたは、私のあなた、私は、あなたの私」と捉えた姿勢で生きることが必要なだけなのである。

アドルノの言葉は、人類の不可避の宿命であると諦めることなく、国際社会のみならず、我々の身近な社会に対する警告であると肝に銘じたいものである。

Rolls-Royce 顧問 上田愛生